

火星

平成27年2月号



七曜抄

(九)

山尾玉藻

数へ日の声こぼしゐる雀の木
生涯のてのひらをもて初手水
読初の昼深ければ来る雀
手毬唄山のうしろの山も晴れ

しろがねの眉けぶりけり齋粥

初旅や薄むらさきの片つ貝

囃されて大よぢれせしどんどの炎

大寒の馬房の塵のきらきらと

風邪の子の耳を大きく癒え始む

衝立のくれなゐ褪する猪の宿

太白星

杉浦典子

柚提げて大覚寺から道迷ふ
ミロの絵の赤い太陽おでん煮る
ラガー組んで内へ内へと力溜む
圭岳忌 瞼の中に銀杏散る
先生を知るひとりなり銀杏散る
冬の雨鳥獣戯画見に並びけり
訪ふたびに紅葉濃かりし博物館

浜口高子

御火焚や水ふくらんで堰越ゆる
木守柚にひと雨ありし峠口
卷尺の戻る一瞬冬ざるる
荒神の山より剥がす鳥瓜
荒息の綿虫となる坂半ば
荒神谷へゆつくり沈む冬の蝶
太刀魚の総身の照りや神の留守

火星作品

山尾玉藻選

燠搔いて落葉にあたらしき炎
宝塚山本耀子

水音を引き摺つてゆく落葉籠

没り日どき枯野に道の見えてきし

つくばひの水を搔い出す今朝の冬

櫓の音のほかに音なき深雪晴

青空の上の空より銀杏黄葉
八幡坂口夫佐子

胸元へ没り日まつすぐ風邪心地

天窓のひかり四角にひしを樽

南天の房流れゆく年の暮

照り返す枯田の中
徒鴉

柿すだれしてあをぞらの痛さうな
宝塚蘭定かず子

川まぶしめば穂芒の傾ぎけり

短日や塩して魚の光りたる

落葉掃きぬるしづけさに目覚めけり
文机のまどろみに来し夕笹子
手どりたる鯉に胴ある豊の秋
山彦のもつとも近しこんやく玉
拭いてやる馬のまなじり神無月
にほどりの潜ぐ力に暮れにけり
山の辺や日向日蔭の柚のいろ
雪霏霏とまぐるの胴のつやめけり
一陽来復塗椀の湯気ゆたかなる
焼栗を売る影法師冬至晴
板前の赤き手の出す酢牡蠣かな
路面電車にかしこき顔や七五三
立冬の風のま新に大蘇鉄
口切や大名道具のそれらしき
東大寺に隣る十月桜かな
旧道の形にひと栖む夕しぐれ
一鳥は海に紛れし神迎

大和郡山城
孝子

宝塚山田美恵子

神戸深澤
鱻

選のあとに

山尾 玉藻

水音を引き摺つてゆく落葉籠 山本 耀子

ゆつくりとした小流れの辺の落葉籠が流れの下へと引き摺られて行く。籠が地を摺る音と流れの音とが重なって中七までの感応となったのだろう。ずつしりと湿った籠の重たさを感じる。

青空の上の空より 銀杏黄葉 坂口夫佐子

この感慨、降りしきる銀杏黄葉をふと見上げた時の直観であらう。作者には銀杏黄葉がまるで澄み渡る空からの使者であるかのように思えたのだろう。そこに自然と作者の啜啄がある。

落葉掃きぬるしづけさに目覚めけり 蘭定かず子

当然ながら落葉を掃くと音が立つ。しかしそれを敢えて「落葉掃きぬるしづけさ」と述べて、辺りの静けさをこの上なく際立てている。佳句である。

手どりたる鯉に胴ある豊の秋 城 孝子

「鯉に胴ある」の断定によりはち切れんばかりに肥えた鯉やその大きさが窺い知れよう。抱えられた鯉を軸として豊饒の秋を印象的に描いた。

板前の赤き手の出す酔牡蠣かな 山田美恵子

常に濡れるので板前の手はふくよかだが、冬は冷たさで赤くなっている。その手が酔牡蠣を出した瞬間に一層赤く感じられたのは、酔でめめられた牡蠣の不透明さの所為であろう。

あをぞらの翳る一瞬ゆりかもめ 小林 成子
陵を華やぎ渡る百合鷗 松山 直美

一句目、晴れ渡った冬空へ不意に百合鷗の一群が飛び立った。一瞬、無数の羽々が陽光を遮ったようで、その思いが「翳る」となったのだ。

二句目、昏く静まり返った陵の空を百合鷗の一群が過った。百合鷗たちの白さや賑やかな鳴き声で、華やかな空に変化したのである。

両句は非常に対照的に百合鷗の飛翔を捉えており、その点から「百合鷗」とは背景次第で陽にも負にもなる詩因を抱え

た季語であることが知れる。

寒鯉のごつんごつんとぶつかりぬ 白数 康弘

餌に寄り集まる鯉だろうか。実際に鯉がぶつかる音が聞こえる筈はないが、寒鯉の寒々しい負のイメージが「ごつんごつん」のオノマトペの感覚を呼んだ。常識的なオノマトペではない。

嘴より鵜の落ちゆける冬の川 河崎 尚子

この鵜、着水したのではない。上空より餌となる魚めがけて急降下したのである。上五中七の描写が的確であり、殊に「落ちゆける」の表現が臨場感を湛えている。(以下略)



恒星圈

米澤光子

立止るポストの前にくさめかな
ペタンクの玉のかちりと冬日向
軍手して三坪半を冬耕す
鈴の緒に風の来てゐる神の留守
くさめして畦の痩せ犬走らす

飯塚 糸子

蘭定かず子

たつぷりと眼鏡曇りぬ栗ごはん
かはたれの枯田の上の一つ星
手袋を脱いでサーカス小屋に入る
母の歩に添うて拾ひぬ櫟の実
めん鶏が日なたを駆くるお講風

笹鳴に肩上げの針休めけり
木枯や蔵のどこかに火消し壺
学僧の火種配れる落葉かな
くれなゐの天鷲絨の椅子憂国忌
枯野原尽き轟音の滑走路

伊勢きみこ

渡辺数子

嫗らのちぎり絵あそび冬に入る
冬薔薇風呂の温度を一度上げ
電飾の遊覧船や冬ぬくし
小春日や子がウクレレを弾いてをり
重ね着やマウスの電池入れ替ふる

蜜柑山案内の人と沖を見て
歩こう会を曆に記す霜の晴
抽斗の四隅拭ひぬ冬の鵲
焼芋屋の笛の連れ来し時雨雲
朱の鳥居いくつもくぐり冷まじや

獅子座

山尾玉藻推薦

林 範 昭

庖丁の銘にくづし字冬ぬくし
春遠し絶筆の絵は山ひとつ
三角の石が山祇ならひ吹く
杳脱ぎに鉈横たはる冬日かな

今 澤 淑 子

日イ差して少うし紊れ冬すみれ
東山乳房のやうに紅葉して
霜の夜のインク瑞瑞しく走る
ブリキ缶に飴の音するハロウィーン

涼 野 海 音

色鳥やペットボトルに雨の粒
爽波忌や岩倉ゆきのバスを待つ
小鳥屋の窓開いてゐる小春かな
尻尾なき犬の来てをり日向ぼこ

西 村 節 子

ほよ宿す木立の奥の冬落暉
杳脱に猫の反りたる冬支度
橋立の練炭火鉢汐流る
着ぶくれて融雪パイプまたぎけり

湯 谷 良

今年酒そそぎし墓と向き合へり
白熊の冬の入り日に腰おとす
枯芦や田舟のくぐる橋いくつ
迷路めく水路に田舟冬ざるる

藤 田 素 子

はつふゆの入浴剤の浅葱色
稚あやす婆の口もと冬の鴟
電柱の相合傘に夕しぐれ
みささぎに鴉の声や冬早

西 畑 敦 子

カンテラの灯に獣めく朴落葉
露天湯へ径ゆづり合ふちやんちやんこ
朴落葉しづかに積もる秘湯かな
シャンソンの口ついて出る古ジャケツ